

また院のみやの御息所、わかなを給ふに小松ありて、片岡の野邊のこまつを雪間より同上などみえたり、扱子日の遊を、或は朱雀院、圓融院などの御時より有けるにやと公事の歌に、初春の初子のけふの玉は、きと萬葉よめるによれば、いと舊より此遊はありしなり。され共その歌に、小松引よしはみえねども、柿本人丸の子日の歌に、二葉より引こそうゑと家めるにて、子日に小松引ける事は、承平の頃より始りしにはあらざるなり、然るを後の世に至りて、子日の若菜といへば、ひたすらに七種の菜をそろへて奉るとのみおもへるは、古を玄らざる誤り也。

〔西宮記 正月 下〕若菜 上子日、内藏、内膳、各供若菜

〔北山抄 正月〕上子日、供若菜事 司内藏察、内膳

〔年中行事秘抄 正月〕上子日、内藏司供若菜事

内膳司同供之 十二種若菜 若菜蘿、苣、芹、蕨、蕷、葵、芝、蓬、水蓼、水雲、松河海抄、○白河院仰云、松字如何、師遠申云、若菘、上皇被仰云、相具松進上、此僻事也。古保福和名 七種菜 蕤、蕷、葵、芹、菁、御形、須々代、佛座

〔公事根源 正月〕供若菜

上子日

内藏察ならびに内膳司より、正月上の子日是を奉る也、寛平年中より始れる事にや、延喜十一年正月七日に、後院より七種の若菜を供す、又天暦四年二月廿九日、女御安子の朝臣、若菜を奉れるよし、李部王の記に見へたり、若菜を十二種供事あり、其くさぐは、若なはこべら、苣せり、蕨なづな、あふひ、芝蓬、水蓼、水雲、松とみへたり、此松の字の事、白川院御時師遠に御尋有しかば、若松と書て、こほほねと讀也、若此事にて侍ると申き、松をそへて奉る、さてはひが事也と、上皇被仰侍き、尋常は若菜は、七種の物也、ナシナ薺はこべら、芹、菁、御形、すゝしろ、佛の座など也、正月七日に七種の菜羹を